

交流の6段階モデルによる高齢者の社会参画を促進する要因分析 ～「ミレニアム・プロジェクト」・桐生多世代交流実験を事例として～

群馬大学 富山 慶典
群馬大学 森 美有紀
千葉商科大学 熊田 禎宣

1. はじめに—研究の背景と目的—

日本の総人口に占める高齢者の割合は、2001 年度では 5.6 人に 1 人、2015 年には 4 人に 1 人となる¹。このような社会では、介護が必要な高齢者が増える一方で、元気な高齢者も増えると考えられる。元気な高齢者は、活動的で、健康や生きがいのために無理なく働くことを望んでいる。65 歳以上の労働力人口比率を比べてみると、日本は 22.6%、アメリカは 12.6%、フランスは 1.5%、ドイツは 2.7%であり、日本は極めて高い水準にある²。高齢者の健康と生きがいのためには、高齢者が社会との関わりを持てる就業の機会や活躍の場を、社会として構築していかなければならない。

しかし、高齢者のこのような高い就業意欲に反して、元気な高齢者が活動できる場はあまりないというのが現状である。その原因の一つに、高齢者を「世代別・領域別」にとらえてしまっている点がある³。これからの社会は、若者も高齢者も分け隔てなく、多世代交流のできる社会が必要になる。社会の中で多世代交流が活発になることにより、高齢者が活躍できる場が生み出され、高齢者の就業の機会にもつながっていくのではないだろうか。

高齢者は、知恵や経験、地域の歴史に関する知識を持っている。一方、若者は、情報技術（以下、IT）に関する知識を持っている。このようなお互いの知識を共有することによって、高齢者の知識や経験を次の世代へ伝承することや IT を活用することが可能となり、多世代交流が実現できると考えられる。

しかし、全く面識のない高齢者と若者とを結びつけることは容易ではない。高齢者と若者との接点をとirmつ、地域に密着した幅広いネットワークを持つ主体が必要になる。このような幅広いネットワークを持ち、高齢者と若者とを結びつける存在として、地域住民の様々な活動を支えている NPO が注目できる。

このような背景と仮説をもとに、本研究では、ミレニアム・プロジェクトの 2001 年度の一事業として桐生市の NPO がおこなった桐生プロジェクトに参加し、この事業をケーススタディとして、多世代

交流による高齢者の新たな活躍の場を形成する取り組みをモデル化し、その取り組みの中での多世代交流の特徴付けをおこない、多世代交流を成立させる構成要因を明らかにすることを目的とする。多世代交流の特徴付けは、交流のプロセスモデルを提案し、提案したモデルを用いて桐生プロジェクトによる多世代交流を分析することによりおこなうことにする。

なお、本研究では、平成 12 年度厚生白書に基づき、高齢者を「65 歳以上」とする⁴。

2. ミレニアム・プロジェクトにおける本研究の位置付け

2.1. ミレニアム・プロジェクトの概要

ミレニアム・プロジェクトは、新しいミレニアムの始まりを目前に控え、人類の直面する課題に応え、新しい産業を生み出す大胆な技術革新に取り組むことを目的としている⁵。情報化、高齢化、環境対応の 3 分野について、2000 年度から 2 ヶ年計画で、産学官共同のプロジェクトを構築するものである。この「高齢化」分野の 1 つに、7 つの事業より構成されている「高齢者の雇用・就労を可能とする経済社会の実現のための大規模な調査研究」がある。

7 つの事業の 1 つに、「福祉・生活関連サービス分野における高齢者の雇用・就業地域モデルの構築に関する研究」（主査：熊田禎宣）（以下、「福祉・生活関連サービス分野における研究」）がある。この事業において 2001 年度に実施した桐生プロジェクトが本研究のケーススタディの対象である。そこで次に、「福祉・生活関連サービス分野における研究」の中間報告書⁶をまとめることによって、2000 年度の事業の実施内容（2.2 節）および 2001 年度の事業に向けての課題と施策の方向性（2.3 節）を詳しくみてみることにする。中間報告書は、財団法人高齢者雇用開発協会のホームページより、ダウンロードすることができる（<http://www.assoc-elder.or.jp/millennium/chukan.html>）。

2.2. 2000 年度の事業の実施内容

2000 年度の事業は、「高齢者の雇用就業実態や就労感、これを取り巻く諸状況を概観すると同時に、

「旧来型の企業形態にとらわれない新たな高齢者の活躍の場（雇用・就業の場）」が成立する条件（社会的条件）を探り、これら「新たな活躍の場」に高齢者の参画を促す条件（個人的条件）を明らかにすることを通じ、関連施策の方向性を探ること」を目的としている。この目的を達成するために、群馬県桐生市、東京都武蔵野市、愛知県犬山市の3地域をモデル地域として選定し、団体や高齢者を対象としたヒアリング調査やアンケート調査などを実施している。

これらの調査より、高齢者は、「健康の維持」、「友人や仲間との交流」、「社会または地域への貢献」、「若者世代との交流」へ関心が向いていることが明らかになった。また、高齢者の活躍の場となるNPOなどの団体は、事業運営が安定しているほど多世代交流が活発であることが認められた。このような結果から、高齢者の新たな活躍の場では、「多世代交流」と「地域貢献活動」が不可欠であり、多様な「社会との関わり方」が実現される必要性があげられている。

しかし、現実社会の中で具体化するためには、課題もある。そこで次に、高齢者の社会参画促進に向けた課題とそれを解決する施策を整理する。

2.3. 2001年度の事業向けの課題と施策の方向性

課題と施策は、「個人的条件」、「個人と社会の接点における条件」、「社会的条件」ごとに整理されている（表2.1.）。

これらの実態調査から明らかになった課題および課題に対する施策を複合的に捉え、2001年度は、実際に高齢者の社会参画を促すモデルの構築を目指す事業が企画された。

2.4. 2001年度の事業の企画案

2001年度は、高齢者の「新たな活躍の場」の条件をより詳しく把握するための調査と調査結果を踏

まえた実践的な試み等を通じて、コミュニティ・プラットフォーム（以下、CP）の形成に向けた課題を整理、施策の方向性を検討することとなった。CPは、「高齢者の新たな活躍の場」が、地域に根ざした活動拠点であるという考えのもとに名付けられた。具体的な事業は、多世代交流のための政策認知に関する研究、CP構想策定・試行事業、モデル地域におけるシンポジウム開催事業の3つである⁷。

このうち、CP構想策定・試行事業では、地域の基盤となるCPにおける「高齢者の新たな活躍の機会」のあり方、仕組みについて具体的に提示することとなり、「CP構想策定・試行」、「高齢者向け研修会講師養成」、「NPOマネジメント能力向上支援」のワーキンググループが設置された⁸。そして、「CP構想策定・試行」のワーキンググループが、群馬県桐生市のNPO:桐生地域情報ネットワーク（以下、NPO:KAIN、理事長：塩崎泰雄）を中心に「桐生プロジェクト」として動いた。桐生市を選定した理由は、2000年度の調査により、市民活動が盛んであることが明らかになったためである。また、NPO:KAINは、地域の中で広く活動を続けてきた経験とネットワークを持っているためである。われわれは、NPO:KAINの一員として、桐生プロジェクトに関わる活動に参加した。

3. 桐生プロジェクトにおけるCP構想の策定および試行の取り組み

3.1. ワーキンググループ会議の概要

桐生プロジェクトは、「高齢者の新たな活躍の場」の拠点となり、また高齢者の社会参画を促進する、地域に根ざしたCPのあり方について検討し、実際にCPを支えることになる「メニュー」について、一部を作成・試行することを目的としている。

この目的を達成するために、ワーキンググループが結成された。ワーキンググループは、高齢者から若者までさまざまな世代で構成されており、中高年世代（以下、WG1）と学生を中心とした20代の若者世代（以下、WG2）の2つに分けられる。

ワーキンググループでは、「高齢者の新たな活躍の場の形成」と「多世代交流の実現」に向けて、5回の会議を開催した。会場は、高齢者の新たな活躍の場となりそうな場所が選ばれた。詳細は表3.1.の通りである。

会議は5回おこなわれただけであるが、実際には、会議の打ち合わせや、取材、編集作業などを5回、聞き取り調査取材などに20回以上の会議をおこなっている⁹。さらに、会議を開催するに当たり、ワ

表2.1. 高齢者の社会参画に向けた課題と施策の方向性

	中心的課題	施策
個人的条件面(個人の参画を促すための条件)	世代を超えた交流を実現すること 趣味志向や家庭志向が強いという人たちに、社会貢献に結びつくような活動には気軽に参加できるものもあると周知すること	高齢者と若者とがともに学ぶ学習機会の整備など 社会貢献活動等に関する意識啓発や意欲開発事業、団体等における活動の一日体験など
個人と社会(団体)の接点における条件面(個人と社会の接点における社会参画促進条件)	企業や団体などを立ち上げたいとする者をサポートすること 多様な志向を持つ個人と団体などにおける様々な活動をマッチングさせること	新たな融資制度の創設や同じ志を持つ者同士の交流などができる環境の整備など インターンシップ制度やマッチングシステムの整備など
社会的条件面(個人の活躍の場たる団体等の充実条件)	市民活動志向・趣味志向・家庭志向を持つ個人が活動を通じて社会に役立ちたいと思えるような機会を提供できる場を数多くつくること 団体における事業運営に資するところの、連携支援やノウハウの提供、資金面での支援などを充実させること	団体などに対する事業ノウハウの提供、行政や企業からの適切な支援が実施されるための環境の整備など NPOマネジメントスクールの創設や新たな寄付金制度の創設

表3.1. 桐生プロジェクトの概要

会議	日	会場
第1回会議	2001.6.23 2001.6.24	桐生倶楽部 ホテルきのこの森
第2回会議	2001.7.30	桐生市民文化会館
第3回会議	2001.9.10	織物参考館"紫"
第4回会議	2001.10.14	織物参考館"紫"
第5回会議	2001.11.26	織物記念館

ーキンググループ内での交流のほか、ワーキンググループ外の人たちとの交流も盛んにおこなわれた。これら会議の準備段階の活動を含めた上述の会議の詳細は次の通りである。

3.2. CP 構想の策定に向けての活動（第 1、2 回会議）

第 1 回会議では、WG1 メンバーによる活発な意見交換がおこなわれた。その結果、桐生の伝統文化である「織物」を抜きに「高齢者の新たな活躍の場」と「多世代交流の実現」に向けて活動することはできないことがみえてきた。そこで、多世代が参加できるテーマを「織物」とすることに決めた。

第 2 回会議までに、織物に携わる高齢者などを対象とした聞き取り調査を WG2 が中心となっておこなった。詳細は表 3.2. の通りである。

第 2 回会議では、第 1 回会議であげられた課題をもとに議論を進めた。まず、CP の概念が定義されていなかったため、WG2 の 1 人が調べた CP の語源を WG1 に報告した。この報告をもとに、議論を重ねた結果、CP を「地域に根ざした新しい活動拠点」、「NPO などの活動機会を新たな活躍の場」と定義した。次に、WG2 が聞き取り調査の報告をし、多世代交流の重要性と多世代が参加できるテーマを織物としたことへの正当性を確認した。また、繊維産業総合コーディネーターである高橋和夫氏から桐生の繊維産業の状況や活動の波及効果などを伺った。最後に、試行錯誤しながら「多世代交流可能なシステムとは何か」を議論した。多世代交流の可能な場

所とは、CP である。CP は、公民館や図書館などのハード面と子供会や婦人会などのソフト面であるという意見がだされた。そして、CP は、コミュニティ・アーカイブズ（以下、CA）の構築であるという意見が出された。CA とは、「地域固有の文化・歴史などを後世に伝え、まちの文化遺産を大切に作る心や思想を高齢者たちから聞き取り、それを編集・蓄積するプロセスから醸成する作業そのもの」をいう¹⁰。歴史文化を残し、後世に伝えるためには、高齢者の知恵や経験と若者との交流が必要であることから、CA づくりは多世代交流を促進する可能性の高いと判断するに至った。

次の回会議では、CP の試行に向けて、より具体的に CP のメニューづくりをおこなうことになった。

3.3. CP 試行実験に向けての活動（第 3 回会議）

会議の準備として、打ち合わせをおこない、織物工程の 1 つである「撚糸」に注目することになった。そして、WG2 が中心となり、織物工程に関する資料を収集した。具体的には、平成 2 年に桐生市老人クラブ連合会が編集した『明日への遺産』という本の中で、織物に関連した文章を抜き出し、TEXT 化した。また、IT を活用して、「水車」と「撚糸」について調べたり、織物工程をしていた武藤圭介氏に聞き取り調査をおこなったりした。

会議では、CP の試行に向けた具体的な計画が話しあわれ、次の 2 つが企画案として出された。

1 つ目は、CA のシステムづくりである。NPO の事務局などを拠点とし、「撚糸」について地域住民を中心に資料作成をお願いし、学生や事務局がその手助けをする。具体的には、「水車のある風景」に絞り、聞き取り調査の実施、水車と撚糸のイベントを開催する。

2 つ目は、IT を応用した新しいネットワークづくりである。集めた織物関連の情報などをまとめるためには、IT が必要になる。そこで、バーチャルとリアルとを含めた新しい「隣組」の中で、蓄積・活用するネットワークづくりをおこなう。具体的には、ホームページ上に蓄積した情報を公開することや情報サロンの設置、インターネット勉強会などである。

会議では、「CA のシステムづくり」についてより具体的に検討をおこなった。まず、WG2 が、水車などについて調べた内容や TEXT 化にあたり『明日への遺産』を読んだ感想を報告した。次に、WG1 から「水車」と「撚糸」を選んだ理由として、『明日への遺産』を始めとして、文献の中に桐生は水車

表3.2. 聞き取り調査の概要

氏名	職種・役職	調査日	テーマ	目的
山田耕司	「大風呂敷」店主	2001.7.8	桐生の町と子どもたち	地域活性化や多世代交流のヒントをえること
高松靖郎	高松紋切り所・社長 紋切業	2001.7.14	紋切りについて	織物工程の 1 つ「紋切」に携わる職人さんを通し、桐生地域における織物の現状を把握すること
森山 亨	元桐生地場産業振興センター専務理事	2001.7.18	桐生の織物と歴史	桐生地域の多世代交流を考えるため、桐生の歴史や文化の認識を深めること
奥野梅夫	伝統工芸士 桐生引き染めばかし	2001.7.21	桐生引き染めばかし	桐生で活躍している染めの職人さんを通して、伝統工芸の伝承を含めた職人の現状を知ること
後藤誠三	後藤グループ・専務 紋工芸士 桐生織	2001.7.22	後藤織物と桐生の歴史	桐生地域の織物業界の現状と企業から見た織物業の在り方について知ること
大西康之	一店一作家運動の主宰者	2001.7.25	一店一作家運動とまちづくり	桐生地域でおこなっている活動を通して、桐生の活性化のヒントを得ること
近藤幸子	着物古着ショップ「睡蓮」店主	2001.7.26	着物古着と高齢者	着物の古着屋さんを通して、着物に対する人々の認識状況や今後のお店の展開を知ること

が数多くあるまちであったことがあげられた。このような議論の末、「水車の廻る風景を求めて」と題して、多世代交流イベントを開催することになった。

3.4. 多世代交流イベントの開催（第4回会議）

イベントの準備 連携の輪を広めるために、イベントの主催や共催を募った。その結果、主催に2つの団体が名乗りをあげた（表3.3.）。また、さまざまな情報を入手するために、ワーキンググループが水車関連の情報を調査するほかに、マスメディアやITを使って地域住民に広く情報提供を呼びかけた。その結果、33名の方から情報が提供された。収集した資料は、布製の巨大な写真（8枚）、展示用パネル（42枚）にした。会場の設営やパネルなどの展示は、ワーキンググループのメンバーでおこなった。

シンポジウム（イベント前半） イベントには、高齢者を中心に約60名が参加した。イベントの詳細は、表3.3.の通りである。

前半は、「水車シンポジウム」とし、パネルディスカッションをおこなった。パネリストがそれぞれの水車の記憶などを語った。また、桐生の水車の特徴や水車研究会の発足や『明日への遺産』第2弾の発行などが提案された。このように、活発な意見交換がおこなわれ、一般参加者もワーキンググループのメンバーも熱心に耳を傾けていた。

聞き取り調査（イベント休憩時） 30分間の休憩時に、WG2が一般参加者に対して聞き取り調査をおこなった。調査では、改めて調査にいけるように、氏名や連絡先を必ず答えてもらうように心がけた。最終的には、14名から回答を得ることができた。高齢者の方々は、WG2の質問に活き活きと答えてくださり、高齢者にとって経験や知識を披露し、次の世代へと伝えるという活躍の場となった。

フリートーク（イベント後半） 一般参加者に自由な意見交換の機会を提供した。高齢者は、持参した資料を紹介したり、資料をもとにパネリストと活発な議論を展開したりした。最後に、コーディネー

ターの長田氏が「高齢者の力を借りて、桐生に残せるものを残していきたい」と述べ、イベントは終了した。

このイベントを通して、CAづくりは、高齢者を活き活きさせることを確信した。

3.5. CP構築の策定および試行実験のまとめ（第5回会議）

イベント終了後に、ワーキンググループの手によって、撮影した写真を編集し、CAとしてホームページ上で公開した(<http://www.kiryu.co.jp/waterwheel/>)。

会議では、まずイベントの波及効果が報告された。具体的には、小学校から水車の資料の貸出申し込み、水車研究会の発足などである。新たな活動の場が波紋のように広がったことがわかる。

次に、これまでの会議や試行実験の報告書案に検討を加え、校正した。この会議を持って、プロジェクトは終了し、ワーキンググループも解散となった。

以上、桐生プロジェクトの活動を詳しくみてきた。これらをまとめたのが表3.4.である。活動の中で多世代交流が頻繁におこなわれているけれども、それらにどのような特徴があるのかは明らかではない。「交流」という言葉は日常的に使われているが、そもそも交流はどのようなプロセスを経て発展していくのだろうか。そこで次に、交流のプロセスモデルを提案し、それを適用することにより桐生プロジェクトにおける多世代交流の特徴を明らかにする。

4. 交流の6段階モデルの提案とその多世代交流への応用

4.1. 高橋モデルの批判的検討

高橋（1997）は、交流を「違った系統、種、類のものが相互に入り交じり、相互に一致点を目指して選択をし、一致点が見いだされたら構造化し、一定期間の安定を生みだし、そのことが、また、新たな変化を作り出し、相互に繰り返しながら、新しい世界を作り出すこと¹¹⁾」と定義し、交流のモデルを提案している。さらに、その発展形として、「個々別々に存在せず、かなり強い結び付きをもって重なりあうという点で、別々の世界から1つの世界に統合されるプロセス」を「協力のモデル」としている¹²⁾。

果たして、交流は「協力のモデル」で完結するのだろうか。共通する目的があれば、協力関係は続くが、目的が達成された場合、協力関係が解消されることもあるだろう。交流のプロセスを「協力のモデル」までで説明するには限界があると考えられる。また、「協力のモデル」は、交流の発展形であり、交流が発展している段階の1つであると考えられる。これ

表3.3. イベントの概要

イベント名	水車の廻る風景を求めて
開催日時	2001.10.13(土) 13:00～16:00
主催	桐生市老人クラブ連合会 ファッションタウン桐生推進協議会 桐生プロジェクト委員会(桐生プロジェクトワーキンググループ)
協賛	桐生市・桐生商工会議所
場所	織物参考館"紫"
内容	前半:水車シンポジウム 後半:フリートーク
シンポジウム 出演者	コーディネーター:長田克比古(NPO:KAIN副理事長) パネリスト:小池久雄(共立織物株式会社・会長) 塚越康之(桐生市老人クラブ連合会・会長) 亀田光三(郷土歴史研究家)

らの事から、われわれの交流プロセスでは、「協力のモデル」という概念は使わないことにする。

次に、これらの批判点を含め、高橋のモデルに改良を加え、交流のプロセスモデルを提案する。

4.2. 交流の6段階モデルの提案

前提 A及びBがそれぞれ単独で存在する。A、Bは互いに何ら関係なく、独立している。

第1段階：しかけ Aは、目的・目標の達成を目指し、Bへ働きかける。

第2段階：さぐり BはAの働きかけに応える。お互いに本音は出さず、変化することはない。

第3段階：あたり AとBはそれぞれ外部に広がりつつ、情報の提供、交換をおこなう。それぞれの内部では、他方から受け取った情報をフィードバックする。そのことによって、それぞれが相手の影響を受けて変わり、共通点の当たりをつける。

第4段階：あわせ AとBは情報のフィードバックを繰り返すことによって、お互いの相違点を受け入れながら、共通点を見つけだし、協調行動をおこなう。AとBとの結び付きが強くなる。

第5段階：うごき AとBは同じ世界を共有し、1つのことを成し遂げる。互いの影響を受けて大きく発展する。

第6段階：わかれ AとBは1つのことを成し遂げると、それぞれ独立し、大きく発展した状態で前提の状態に戻る。独立状態に戻る時に、また共に何かをやろうという約束をする場合としない場合がある。

以上の交流のプロセスを「交流の6段階モデル」と呼ぶ。モデルは、6段階までであるが、すべてのプロセスを踏まなくても、「交流」である。段階を重ねていけば、より深く継続性の高い交流が実現できる。3人以上の主体での交流についても、これらの段階を組み合わせることによって記述することができる。

4.3. 6段階モデルにおける桐生プロジェクトでの多世代交流の分析

多世代交流を分析することから、第1に主体の世代の違いに注目すると、WG1、WG2、高齢者、外部者の4つに分類できる。外部者は、具体的には地域住民や資料提供者のことを指し、あらゆる世代が存在しえる。WG1とWG2が一緒の場合には、単にWGと表す。表4.1は表3.4.上でこれらの間での交流を色分けしたものである。分析結果は次の通り。

WG1とWG2との交流 交流は第6段階まで順番に発展している。見方を変えると、桐生プロジェ

クトは、協調行動であり、第4段階から始まっていると捉えることもできる。しかし、WG1とWG2とは普段からさまざまな活動を共にしており、今回のプロジェクトは新たな活動の始まりである。そのため、第1段階から始まると捉えることにする。この二者間の交流は、会議の時に深まる。そして、高齢者とも交流し、影響を受けることによって、より二者間の交流が深まっている。

WG1あるいはWG2と高齢者との交流 交流は、ほとんどが第3段階までである。第3段階に発展するまでに、WG1が高齢者とWG2との交流を深める仲立ちをしている。高齢者とWG2との交流は、第3段階までで短い期間であるが、WG2に大きな影響を与え、WG2が新しい意識を持つことを促している。

高齢者と高齢者との交流 交流は、第4段階まで発展している。ただし、第4段階は、多世代交流イベントによって新たに生み出された交流である。イベントは交流の始まるきっかけであり、さらに新たな交流を生み出すきっかけにもなっている。

WGと外部者との交流 交流は、第3段階までである。第1段階は、地域住民というかなり広い範囲の人たちに呼びかけ、地域住民の一部の人たちが資料提供者として第2段階をおこなう。マスメディアを使った呼びかけが交流のきっかけとなり、新しい情報を入手したり、新たな交流が始まったりする。

第2に、交流の段階に注目してみる。表4.2は表3.4.上で交流の段階を色分けしたものである。全体としては、第1～6段階まですべてのプロセスを踏んでいる。しかし、第1～2段階は、非常に短く、ほぼ同時に起こるか、すぐに発展してしまうかである。また、多世代交流イベントでは、第1段階の交流が多いことに注目したい。「しかけ」が様々な段階の交流を生み出していると考えられる。

以上が桐生プロジェクトでの多世代交流の分析結果である。次に、この結果を踏まえて、桐生プロジェクトにおける多世代交流の特徴を考察する。

4.4. 桐生プロジェクトにおける多世代交流の特徴付け

われわれは5つの特徴をあげることができる。

(1) 地域の中で培ってきた広くて緩いネットワークの存在：交流は、短期間に発展している。その理由として、NPO:KAINが、様々な人的ネットワークや団体ネットワークとの接触経験を持っていたことが考えられる。つまり、地域の中で培ってきた広くて緩いネットワークができあがった上でおこな

われた交流なのである。また、桐生プロジェクトでは、中高年世代が世代と世代とを仲立ちをする「核世代」となっている。核世代は、中高年世代がなるとは限らない。しかし、全く接点のない世代と世代を結びつけるためには、地域の広いネットワークが必要だと考えられる。したがって、多世代交流には、広くて緩いネットワークが不可欠であるといえるだろう。

(2) 世代内ネットワーク間での気軽に緩い連携：WG2 と高齢者との交流は、第3段階で終了する。交流をおこなっている期間は短く、これ以上の交流を求めることがない。期間が短いことで、気軽に交流の場に参加するようになり、他の世代のネットワークを知る機会を得ることもできる。他団体との連携によっても、他の世代内ネットワークを知ることができる。お互いを知ることによって、信頼が生まれ、いつでも連携を組むことができるようになるだろう。気軽に緩い連携は、自分の世代にないものを補うことができると考える。多世代交流は、たて(世代)とよこ(団体)とのつながりが重要なのである。

(3) 地域での育自環境の提供：多世代交流は、今後も活動を続けていく人材やリーダーを育てるためにおこなっているのではない。しかし、多世代交流から活動が続ける人材が生まれる可能性がある。なぜなら、参加することで、様々な人たちから影響を受けたり、活動の経験を積んだりして、自分自身が成長するためである。つまり、「育自」環境を提供しているのである。

(4) 交流中の IT、マスメディアなどの積極的活用：IT などを活用し、新しい情報を入手する。新しい情報は、交流を促進する起爆剤となる。また、地域住民に広く情報提供を呼びかけることができ、新たな交流のきっかけを生み出すことになる。

(5) 記録・伝承のためのデジタルコンテンツの作成：イベントの記録を WG2 が編集しており、デジタルコンテンツ作成の作業そのものも多世代交流を実現する1つの方法であるといえるだろう。さらに、デジタルコンテンツとして残しておくことは、地域の記録を残すことであり、その記録をもとに次の世代との多世代交流の実現につながると考える。

以上の5つの特徴は、さらに3つにまとめることができる。(1)と(2)が「地域ネットワーク」、(3)が「地域エデュケーション」、(4)と(5)が「地域インフォメーション」である。つまり、高齢者の社会参画を促進する多世代交流をおこなうためには、「ネットワーク」「人」「情報」の3つがキーワード

になる。

5. おわりに

本研究は、桐生という古くから繊維産業が盛んな地域を対象としておこなった。桐生には、「織物」というあらゆる世代が共有できる歴史文化がある。この「織物」をテーマにした CA づくりを行うことによって、多世代交流を実現することができた。

それでは、ほかの地域でも桐生と同じような方法で多世代交流を実現することができるだろうか。例えば、地縁が希薄な都市型の地域に住む団塊の世代やホワイトカラーだった高齢者は、地域の歴史等をあまり知らないかもしれない。そのような人たちに対しては、コミュニティ・ビジネスなどに注目する必要がある。なぜなら、地縁が希薄な都市型の地域には、様々な職に携わった経験を持つ人がおり、このような人たちが集まることで、起業やビジネスの可能性が広がるためである。ビジネスを通して多世代交流が始まることが期待できる。高齢者の社会参画を促進する多世代交流を実現するためには、地域の特性をしっかりと把握する必要がある。

¹総務庁統計局センター,高齢者人口の現状と将来,
<http://www.stat.go.jp/guide/5-3-1.htm>

²総務省統計局統計センター,高齢者の就業状況,<http://www.stat.go.jp/data/guide/5-3-2.htm>

³熊田禎宣,富山慶典,「高年齢者の活力ある社会参画を実現するための基盤的方策」,地域社会学会 地域学研究第31巻第1号,2001

⁴厚生省編,『厚生白書(平成12年度版)』,p10

⁵首相官邸,ミレニアム・プロジェクトの基本的な枠組みについて,<http://www.kantei.go.jp/jp/mille/991020millpro.html>

⁶財団法人高年齢者雇用開発協会,『平成12年度厚生労働省受託 ミレニアム・プロジェクト 福祉・生活関連サービス分野における高齢者の雇用・就業地域モデルの構築に関する研究 報告書(中間報告)』,2001,

⁷財団法人高年齢者雇用開発協会,『平成13年度厚生労働省受託 ミレニアム・プロジェクト 福祉・生活関連サービス分野における高齢者の雇用・就業地域モデルの構築に関する研究 報告書(案)』,2001,P5

⁸桐生プロジェクト第1回会議議事録(1),pp1-4

⁹前掲,『平成13年度厚生労働省受託 ミレニアム・プロジェクト 福祉・生活関連サービス分野における高齢者の雇用・就業地域モデルの構築に関する研究 報告書(案)』,2001,P40

¹⁰前掲,『平成13年度厚生労働省受託 ミレニアム・プロジェクト 福祉・生活関連サービス分野における高齢者の雇用・就業地域モデルの構築に関する研究 報告書(案)』,2001,P41

¹¹高橋直子,『国際交流の理論—交流から協力へ』,勁草社,1997,P30

¹²同書,P40